

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：34525

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K10262

研究課題名（和文）学生の思考力強化を図る小児看護学実習の課題構造の明確化と教育方略の開発

研究課題名（英文）Clarification of task structure and development of educational strategies to foster thinking skills in students' practicing pediatric nursing.

研究代表者

泊 祐子（TOMARI, YUKO）

関西福祉大学・看護学部・教授

研究者番号：60197910

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究目的は、小児看護学実習において学生の思考を深めるための指導ガイドラインを開発することである。そのため学生がよく遭遇する「実践と理論の統合」等の指導を必要とする実習場を拾い現象へのネーミングを行なった上で、次にその場面での学生の思考を深める指導方法を明らかとした。上記の結果を基に、「小児看護学実習指導ガイドライン」を開発した。このガイドラインの利用により新人教員の指導スキルの向上を可能にした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

小児看護学実習において学生が遭遇しやすい看護現象を明確に可視化した。その場面での学生の思考を深める指導の方法を提示したガイドラインはこれまでに出版されておらず、新人教員が早期に指導スキルを上げることが可能となる。また熟練教員も自己の指導を見直し機会となる。

教員にとって膨大な時間を費やしている実習指導を楽しく有意義な教育及び教育的意義を見出すことができる書籍となったと考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop teaching guidelines for deepening students' thinking in pediatric nursing practice. To this end, we identified practice situations that students often encounter that require instruction in the "integration of practice and theory," and after naming the phenomena, we then identified instructional methods to deepen students' thinking in those situations. Based on the above results, we developed "Guidelines for Teaching Pediatric Nursing Practice. The use of this guideline enabled new faculty members to improve their teaching skills.

研究分野：看護学

キーワード：小児看護学 看護学実習 看護教育

1. 研究開始当初の背景

(1) 看護基礎教育における実習の重要性

看護基礎教育において、ケアの対象者の状況に合わせて適切な判断ができることは重要な教育目標である。判断力を磨くために様々な思考を促す授業方法ーリフレクション、アクティブラーニング、反転授業等の主体的学びを得る方法がとりいれられている。看護教育においては、実習は主体的学びを得る場である。厚生労働省(2011)は、効果的な実習の方法の1つに「学生の自律的な学習を促進するために、日々の学生の体験および実践能力の習得状況を確認し、その学生の状況に合わせたかかわり方をする必要がある」と報告している。

実践知を必要とする看護学では、実習の場でしか学べない学習内容を大切に教員が「学生の体験」をキャッチし教材化できることと、学生の体験を意味づけ、実践と知識(理論)を結びつける(統合)教員のかかわり(指導)が不可欠と考える。

(2) 小児看護に対する学生の思考の特徴

小児看護学教育では、演習やロールプレイを行っても子どものリアルな反応や行動を再現は難しく、DVDなどでの映像が用いているが、教える困難を感じてきた。初めて実習で小児に出会う学生もいることから、私たちは、これまで小児看護学における「看護実践と理論を統合する」ためには、どのような実習プログラムがよいのか、実践と理論を統合させている指導場面とはどのような内容であり、教員はどのような指導方法をしているのかを検討してきた(泊他:2017,)。これらの研究から学生の思考の特徴として、①眼前にしている事象でも、もっている知識と結びつけられにくく、患者の生活行動と合わせられない思考の硬さや1つの情報だけで判断するなどのパターン化した思考の傾向、②成長発達知識はあっても子ども特有の反応の表現方法や、病影の影響による子どもの反応を理解しにくい傾向が窺えた。複雑で状況的アプローチが必要な看護職を目指す教育においては、学生の思考力を強化する指導の明確化は重要である。上記のような思考の特徴のある学生に対して、折角もっている知識を活用して思考できるように、課題に適した指導方法の明確化など、思考力強化を図る教育方略の開発が急がれると考える。

2. 研究の目的

小児看護学実習において学生の思考力強化を図るために、小児看護学特有の学びにくさを踏まえた学習課題の構造の一般化と教育方略の開発を目的とし、実習指導ガイドラインを作成する。

(1)『小児看護学実習における理論と実践の統合を必要とする学習課題』(泊ら, 2017)を基に小児看護学実習における学習課題の不足課題の追加と指導方略の適切性の確認を行う。

(2)小児看護学特有の指導スキルを加味した指導ガイドラインを作成し評価した。

3. 研究の方法

(1) 第1段階:看護実践と理論の統合の学習課題に不足している学習課題の追加

研究参加者:小児看護学実習の指導に5年以上携わっている教員20人が参加した。

調査方法:グループインタビュー

分析方法:質的帰納的法を用いた分析

(2) 第2段階:課題に適した指導方略の明確化と妥当性の確認

研究参加者:第1段階の研究参加者のうち、第2段階にも継続に参加することに同意した教員に加えて約20人程度になるように追加募集し、当日欠席者の除き20人が参加した。

調査方法と分析方法:個人インタビューの逐語録を質的記述的に分析する。

(3) 第3段階:指導ガイドラインの作成

①教育実践等に関するガイドラインの文献研究結果と研究者らの教育実践を基に枠組みを作成する。

②第1段階と第2段階の結果をもとに課題毎に学生の思考と行動特徴を加味する。

③全体構成を見直し、指導ガイドラインを作成した。

4. 研究成果

(1) 小児看護学実習における学習課題の明確化

第1段階の調査結果看護実践と理論の統合の学習課題に不足している学習課題の追加

本研究の基盤とした『小児看護学実習における理論と実践の統合を必要とする学習課題』についての妥当性と信頼性は得られた。さらに、指導教員が感じている最近の学生の傾向として生じやすい課題として、例えば、学生とリフレクションをしているとよく泣く、答えを求めたがる、指導に反発する気持ちが沸くと学べなくなる、等の様子が伺えたので、実践と理論の統合の学習課題とこれらの学習課題を達成するための看護者としての姿勢づくりの「実習に向かう姿勢」の課題が抽出された。

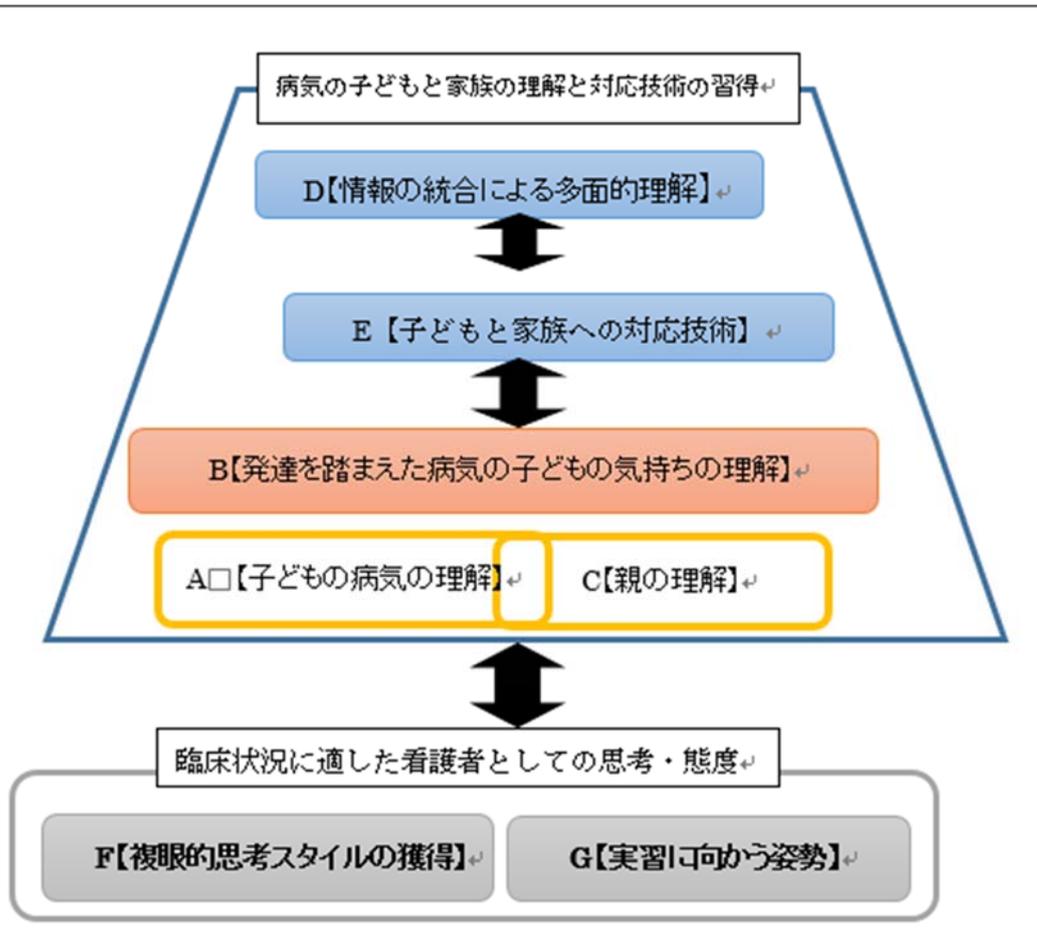


図 1. 小児看護学実習においてよく遭遇する学習課題

小児看護学実習においてよく遭遇する学習課題の構造は、(図 1) に示すように『臨床状況に適した看護師としての思考・態度』を土台とし、その上に『病気の子どもと家族の理解と対応技術の習得』があり、相互作用しながら学習課題を学んでいく様子を相互作用の矢印で示した。

『臨床状況に適した看護師としての思考・態度』には、【実習に向かう姿勢】と【複眼的思考スタイルの獲得】の 2 つの学習課題がある。【実習に向かう姿勢】は、指導者の何気ない言葉に傷ついたり、子どもに泣かれると拒否されたと捉える等の学生自身の感情コントロールができない様子や、実習は終わらせればよいという内容である。【複眼的思考スタイルの獲得】は、思い込み・鵜呑み等の自分流の理解、パターン化した解決策や判断や、これまでの実習経験で得た知識を活用できない等の思考スタイルを修正しなければならない内容である。

『病気の子どもと家族の理解と対応技術の習得』では、病気の基本的知識の理解の【子どもの病気の理解】と、入院している児をもつ親の気持ちの【親の理解】は重なり合いながら、学生は学習が進み、個別性を踏まえて【発達を踏まえた病気の子どもの気持ちの理解】する学習課題があった。それらの子どもの発達・心理・環境・疾患を多面的な理解と子どもと家族の生活の理解を踏まえ、統合的にケアの優先順位の判断や病気の子どもへの援助方法を考える【情報の統合による多面的理解】に進み、次に【子どもと家族への対応技術】に学習課題が積みあがっている。

(2) 学習課題の具体的な看護現象

これらの学習課題ごとに具体的な学生の様子を示した現象のネーミングを【 】にて示した。

【子どもの病気の理解】

【症状を観察しても自分の思い込みで貧血だと結びつかない】

【治療イコール回復と考え実際のデータから判断しなかった】

【発達を踏まえた病気の子どもの気持ちの理解】

【強い倦怠感による不機嫌を自分への拒否ととらえる】

【外観の変化により人目を気にする患児の気持ちに気づかずに遊びを提案】

【親の理解】

【母の言葉を聞いて初めて裏に隠された気持ちに気づく】

【情報の統合による多面的理解】

【必要な情報はとっているが、統合したアセスメントとして表現できない】

【術後の経過が良好な子どもに対して、何を援助してよいかわからない】

【子どもと家族への対応技術】

【付き添いの母親と子どもの間に入りづらい】

【子どもの生活リズムを尊重するうちにケアのタイミングを逃す】

【複眼的思考スタイルの獲得】

【一つの血液データのみで脱水を判断する】

【実習に向かう姿勢】

【指導者からの丁寧な指導に対する落ち込み】

【子どもへの苦手意識から訪室を控える】

【スタッフの測定データのみを参考にして自分で測定しない】

【子どもとの約束を重視しない】

【家族の反応を気にせず、自分の欲しい情報を聞き取る】

(3) 小児看護学実習指導ガイドラインの作成

新人教員も実習指導者も学生の思考力強化を図る小児看護学実習における指導ができるためにこれまでの研究成果を活用してガイドラインを作成した。書名を『小児看護学、実習指導ガイドライン 考える学生を育てるコツ』として、次の構成で執筆した。

<指導ガイドラインの目次>

第1部 小児看護学実習の組み立て

I. 看護学の科目構成と実習目的

1. 科目構成と実習の位置づけ

2. 小児看護学の実習目的・目標

II. 実習目的を達成するための実習施設の組み合わせと実習目標の考え方

1. 実習施設の組み合わせパターン

2. 実習施設の組み合わせのパターンによる実習目標の重みづけ

3. 学校・幼稚園・保育所等の特徴を活かした具体的な実習計画の設定

III. 実習要項の作成

1. 実習要項作成の目的

2. 実習要項に記載する項目と内容

第2部 実習に向けた授業づくり

I. 知識・技術を実践に応用する段階的な授業設計

1. 段階的に知識・技術をケアに応用する学習プロセス
2. 技術演習の目標に合わせた段階的な進め方

II. 実習でこそ学びやすい看護実践と理論の統合

1. 実習場面を想定した状況設定で行う実習直前の技術演習
2. 実習後のまとめ：実習経験を活用できる知識に統合する

第3部 実習施設との協働・連携

I. 実習開始前の準備

1. 実習日程の決定と基本的考え方に関する養成学校と実習施設との調整
2. 小児に欠かせない感染防止対策の準備
3. 実習直前の指導者との打ち合わせ

II. 実習開始後の指導者との調整

1. 学生個々の達成目標の具体化と進捗状況の把握

第4部 実習指導の実際

I. 指導計画作成のための個々の学生の状況把握

1. 学生の特徴とレディネスの把握
2. 実習指導計画の作成
3. 実習進行に合わせた指導計画の修正

II. 実習でよくある課題場面と指導

1. 最近の学生の傾向と小児看護学実習において教員がとらえた学習課題の構造
2. 学習課題状況ごとの指導事例

III. 実習経験を知識体系につなげるための指導

1. 日々の成果を翌日につなげる指導
2. 他領域に拡大できる学びを獲得したと実感できる指導
3. 2週間の実習における学生の成長を意識した指導の例
4. 実習経験を知識と統合する（実習後の振り返り）

第5部 教育評価

I. 実習評価（学生の到達度評価）

1. 評価の基本形態
2. 到達度評価の方法
3. 個人面談の位置づけと意味

II. 教員による教育評価

1. 実習の組み立ての評価
2. 実習環境の評価
3. 指導の評価
4. 総括作成のメリットと工夫

小児看護学実習を担当する教員および指導者に最終評価を受けて出版した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 泊祐子、大西 文子、竹村 淳子、西園 貞子、岡田 摩理、川島 美保
2. 発表標題 小児看護学実習における学生の学習課題の構造
3. 学会等名 日本看護学教育学学会第30回学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 泊 祐子、大西 文子、竹村 淳子、西園 貞子、岡田 摩理、川島 美保
2. 発表標題 限られた場で小児看護学実習を効果的に行う実習計画と到達目標の設定 - 課題と対策の検討 -
3. 学会等名 日本看護科学学会第30回学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 泊 祐子、大西文子、岡田摩理、竹村淳子、西園貞子、倉橋理香、川島美保
2. 発表標題 子どもとの少ない体験を最大限に活かす小児看護学実習の展開方法
3. 学会等名 日本看護学教育学学会第30回学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 泊 祐子、大西文子、岡田摩理、竹村淳子、西園貞子、倉橋理香
2. 発表標題 小児看護学実習において教員が捉えた学習課題の構造
3. 学会等名 日本看護学教育学学会第30回学術集会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	大西 文子 (Ohnishi Fumiko) (00121434)	日本赤十字豊田看護大学・看護学部・教授 (33941)	
研究分担者	竹村 淳子 (Takemura Junko) (00594269)	大阪医科薬科大学・看護学部・教授 (34525)	
研究分担者	西園 貞子 (Nishizono Teiko) (50458014)	奈良学園大学・看護保健学部・教授 (34424)	
研究分担者	岡田 摩理 (Okada Mari) (20745583)	日本赤十字豊田看護大学・看護学部・教授 (33941)	
研究分担者	川島 美保 (Kawashima Miho) (90380328)	聖カタリナ大学・人間健康福祉学部・准教授 (36302)	2020年度より役割終了のため削除
研究分担者	倉橋 理香 (Kurahashi Rika) (80850635)	大阪医科薬科大学・看護学部・助教 (34401)	
研究分担者	神道 那実 (Jindo Nami) (90434638)	日本赤十字豊田看護大学・看護学部・講師 (33941)	2020年度より役割終了のために削除

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------